

【8】原始仏教聖典における *janapada* と *raṭṭha* のまとめ

[0] *janapada* と *raṭṭha* という言葉は、辞書などの解説によるかぎりには、ともに「国」とか「王国」、「地域」あるいは「地方」、あるいは「国民」などという意味が与えられ、その相違があまり明確には示されない。

しかしながら *janapada* は「人々」を意味する *jana* と「足」を意味する *pada* の合成語であり、*raṭṭha* は「支配する」を意味する√*raj*という動詞を語源とし、これに *kṛt* 接尾辞である用具・場所などを示す *-tra* を付してできた言葉であって、これら2つの言葉には直接的な意味はもとより、これらの言葉の持つその背景も異なっていることが予想された。本論では、パーリの原始仏教文献を中心として、これらの語の用例を調査し、上記のような関心を明らかにしようとしてきた。以下はその結論である。

[1] まずジャナパダに関する結論を簡単にまとめてみよう。

上述のように *janapada* は「人々」を意味する *jana* と、「足」を意味する *pada* の合成語であって、「人々」が「足を踏み入れた土地」を原義とする。「足を踏み入れた」というのは「開墾された」「開発された」ということであって、英語で言えば *cultivate* された土地ということになる。また近代においても新しい土地が「開墾」され、「開発」されるのは、一つの地方の「人々」＝部族によることが多く、特にインドの古代においてはその傾向が強かった。したがって具体的には *jana* は「部族の人々」をさすことになるから、*janapada* はその原義を「部族の人々が住む土地」と解釈するのがもっとも現実的である。

そしてこのようにして開墾され、開発された土地は、幾世代にもわたって継承されるから、その土地には血縁・地縁に結びついた社会が形成されることになり、またいつしかその土地独自の生活慣習や宗教的儀礼あるいは言葉（方言）もでき上がることになる。要するに *cultivate* された土地に *culture* が形成されるわけである。したがって *janapada* において形成される社会は、一定の目的達成のために人工的に形成されるゲゼルシャフト的社会ではなく、人間の本質的な営みに付帯して自然的に形成されるゲマインシャフト的社会ということになる。

またジャナパダの広さについていえば、*culture* の独自性をどのレベルによって区別するかによって、広狭さまざまに区分される。大は中央のジャナパダ (*majjhima-janapada*、中国) のように、おおよそガンジス河上・中流域のインドウスタン平野の左半分ほどを指す場合もあれば、その中にあるコーサラもマガダもそれぞれジャナパダと呼ばれうるし、そして小はバーラーナシーのような都市も、あるいはレンビニーのように村程度の大きさの地域を指す場合にも用いられる。

またジャナパダが一般的な意味において「国」を表す場合には、当然の事ながら複数の居住区域としてのナガラ（城壁で囲まれた地方行政官や商工業者が住む地域。市）、ニガマ（複数の集落の住民が利用する商工業者の住む地域）、ガーマ（集落）を含み、さらにはそれらの区域を統合する複数のマハー・ナガラ（城壁で囲まれた中央行政官や商工業者が住む地域。都市）も含まれることになる。今まで使ってきた用語を使えば、「普通の国」も「大国」もジャナパダであるわけである。

このようにジャナパダは本来は「人々が住むところ」であるから、したがって人々が住まない荒野やゴーストタウンなどは含まれないが、しかし「大国」をジャナパダという場合には、当然の事ながらこれらも必然的に包括されざるをえない。

[2] 一方の *raṭṭha* は「支配する」を意味する√*rāj*という動詞を語源とするから、ラッタと呼ばれる地域の上に形成される社会は、支配・統治ということを目的として人工的に形成された組織体であって、これはまさしくゲゼルシャフト的社会であるとする事ができる。また√*rāj*という動詞は *rājan* という言葉と密接に関係し、この *raṭṭha* を支配するものは「王」ということになる。したがって *raṭṭha* の現実的な意味は「王の支配する王国」ということになる。これには「国」という社会組織的なものとその領土と人々が含まれる。

そしてその広さについていえば、これもまた広狭さまざまに区分しえる。なぜなら王にもさまざまなレベルがあり、支配にもさまざまな形態があるからである。王には灌頂を受けた大王はもちろん、アングのような付備国のような王もあり、あるいは一つの小さな村の村主のような者も含まれることになる。またヴァルナとしてはクシャトリヤが多かったことが想像されるが、しかしバラモンもシュードラも、あるいはガハパティも王になりえた⁽¹⁾。また王といえば王制的な政治形態をとる地域を想像させるが、例えば部族共和制を取っていた釈迦族のバディヤ (*Bhaddiya*) も王と呼ばれているように政治形態には関係がない。したがって部族共和体制をとる地域にもラッタは存在したと考えられる。

(1) 中村元『インド古代史(上)』p.137、ならびに山崎元一『古代インドの王権と宗教』pp.090~091を参照。

[3] 上記のように *janapada* と *raṭṭha* は語義の上からははっきりと異なるのであるが、現実的にはこれがあまり明確に自覚されてこなかった。一定の地域がゲマインシャフト的にとらえられればジャナパダと表現され、ゲゼルシャフト的にとらえられればラッタと表現されるのであって、それが「国」とか「国土」とか「国民」と翻訳されてしまえば、区別はないからである。

しかし上記のように検討してみると、このような曖昧なままで放置することは許されないであろう。

ジャナパダは上述したように、自然に形成されたゲマインシャフト的社会を土台とするから、その領域をはっきりとどこからどこまでと限定することができない。そこでインド半島の中央地方とか辺境地方、あるいは雪山地方などというように、漠然とした「地域」を指し示すこともできる。

一方のラッタは支配という権力がおよぶ人工的な社会をいうから、「領土」という語感がピッタリとし、これにははっきりとした境界線が設けられる。したがってある一定の地域を漠然とラッタと呼ぶことはない。

また *janapada* は、「人が住まない土地」すなわち原野やゴーストタウンに対する、血縁地縁的な色彩の強い「開墾された土地」をそもそもの原義としたものであったから、どちらかといえば人工的な色彩の強い都市や町に対して「田舎」をさす場合もあった。しかしラッタにはこのような意味は与えられない。

また出家修行者の立場に立てば、ジャナパダはその出家修行者と地縁・血縁的な関係があるところで、そこで布施を得、生活を維持することは比較的容易であった。しかしながら出家修行者が遊行に出、遊行の生活を続けることになると、必然的にジャナパダから離れることになり、そこにはラッタの生活が待っていた。そこは地縁・血縁的な関係による布施を期待することができない場所であって、生活を維持するためには人々の信仰心に頼るしかなかった。いわばジャナパダはウエットな空間であり、ラッタはドライな空間であったといえることができる。

またラッタが「国民」という意味を有するのは、王の領土に住んでいるというだけではなく、納税をする者、納税に対する見返りとして安全を保障される者、というような意味合いを持つことも忘れてはならない。

[4] *janapada* と *raṭṭha* は上記のようなものであるから、一つの地域を地縁・血縁的な結びつきを視点にして *janapada* ととらえることもできれば、一人の王によって支配されているということを視点にして *raṭṭha* ととらえることもできる。このように *janapada* と *raṭṭha* はそのまま重なり合うこともあると同時に、1つのジャナパダを2人の王が分割して統治することになれば、この場合はジャナパダの方がラッタよりも大きな範囲となり、あるいは2つのジャナパダを1人の大王が統治することになれば、この場合はラッタの方がジャナパダよりも大きいということになる。

ただし社会科学的に「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」という図式が認められているように、原始仏教時代のインドの社会は *janapada* 的な要素が強く、*raṭṭha* 的認識は未だ十分に発達していなかった。したがって「十六大国」と称されるマガダやコーサラなどはジャナパダといわれおり、ジャナパダの方がラッタよりも広い範囲を指す場合の方が多かったといえるであろう。

釈尊時代前後のインドにおいては、「十六大国」が次第に「四大国」⁽¹⁾ に収斂されていったといわれる。そして「十六大国」にはジャナパダという言葉が用いられるが⁽²⁾、「四大国」はラッタと表現されることが予想される。したがって同じく「国」と表現しても、十六大国の「国」と、四大国の「国」は概念が異なるのであって、十六大国の「国」は民族・言語・文化を同じくする地域という意味で用いられているのであり、四大国の「国」は版図という意味で用いられているのであろう⁽³⁾。

このように「国」は時代が進むにつれて、ジャナパダからラッタに変化したことが予想される。これについては次節で検討することにした。

(1) 「四大国」とはコーサラ、ヴァツァ、アヴァンティ、マガダをいう。中村元『インド古代史(上)』p.269以降を参照。アヴァンティとヴァンサ (Vam̐sa, Vatsa) については、水野弘元「初期仏教の印度に於ける流通分布に就いて」p.019、並びに p.031 以下を参照。なお『梵文根本有部律Ⅱ』「出家事」(vol.Ⅱ p.075)には「四大城 (caturmahānagara)」とあり、シュラーヴァスティ、ラージャグリハ、ウッジャイニー (Ujjayinī)、カウシャンビー (Kauśāmbī) が挙げられている。

(2) 本論文【4】[1] p.109以降を参照。

(3) ロミラ＝ターパル博士は「地域によっては、部族が都市国家^{エスノス}に変わるところがある。共同体の中心が氏族から都市に移る。ジャナパダは部族の領域と認められるが、パウラジャーナパダ^{ホリス}」

(都市民と地方民)の観念は都市の存在を知らせてくれる。ラーシュトラという語はラージー支配する一から派生していると言われていたから、ラーシュトラ(領土)へのゆっくりした変化は自明である。したがって、ラーシュトラは政治的意味での領土を指し、ジャナパダのような部族の領域という意味はない(『国家の起源と伝承』p.223)と述べている。

【9】歴史的経緯による *janapada* と *raṭṭha* の用法の変化

[0] 以上、パーリの原始仏教聖典を中心として、さらに若干のサンスクリット文献を利用して、*janapada* と *raṭṭha* の語義とその意味およびその背後にあるものを検討してきた。以下にはアツカター (*Aṭṭhakathā*) をはじめとし、ティーカー (*Ṭikā*) などの註釈書文献 (B 文献) によって、聖典時代から註釈書時代になると、これらの用語の用法がどのように変化しているかを調査してみたい。

[1] まずもっとも顕著な特徴は、原始仏教聖典資料では、部族名と共に用いられたジャナパダという語によって国名が表されていたものが、註釈書文献資料になると、これに代ってラッタという言葉が用いられるようになることである。例えばA文献資料で「コーサラ人たちの諸ジャナパダに (*Kosalesu janapadesu*) 」と表現された「コーサラ」が、B文献資料では「コーサラ・ラッタに (*Kosalaraṭṭhe*) 」と表現されるようになる。

要するに原始仏教時代における「国」は、漠然とした領域しか意味しえない *janapada* であったものが、註釈書時代にははっきりと王が支配統治する「王国」あるいはその領域・領土を意味する *raṭṭha* と認識されるようになったということを示す。もちろんこれは *janapada* と *raṭṭha* という語の意味が変わったのではなく、社会環境が変化したのであって、原始仏教時代は政治体制が整っていなかったために「国」は *janapada* と表現されたが、註釈書時代になると王制という政治体制が整ってきたために、これが反映したのである。

以下には、これまでの原始仏教聖典資料の整理方法にしたがって、まずラッタの「十六大国に見られる用例」と「その他の用例」として仏在処・説処に関わる若干の領地・領土名を紹介し、しかる後に、註釈書時代になって現れる「国」に関するいくつかの特徴を考えてみたい。

なおこれまたこれまでの整理方法にしたがって、*janapada* と *raṭṭha* という用語について、複数形で用いられている場合は実線による下線を、単数形で用いられている場合は破線による下線を施しておく。ただし2つ以上の「国」を表す場合は当然ながら複数形が用いられるが、その他はすべて単数である。これはいうまでもなく、*raṭṭha* が例えばコーサラ人たちの住む土地土地を指すのではなく、組織化されたコーサラ王の統治する一つの「王国」を意味するからである。

[2] まずはじめに、十六大国の表現に見られる用例(国名+*raṭṭha*)を調査する。A文献では16大国はそれぞれ '*mahājanapada*' と表現されていたものが、下記のようにB文献では '*raṭṭha*' と表現されるようになる。

①アンガ・ラッタ (*Aṅgaratṭha*)、②マガダ・ラッタ (*Magadharatṭha*)、[カーシ・

ラッタ (*Kāsiraṭṭha*)、] ③コーサラ・ラッタ (*Kosalaratṭha*)、④ヴァッジ・ラッタ (*Vajjiraṭṭha*)、⑤チエーティヤ・ラッタ (*Cetiyaṭṭha*)、[ヴァンサ・ラッタ (*Vamsaraṭṭha*)、] ⑥クル・ラッタ (*Kururaṭṭha*)、⑦パンチャーラ・ラッタ (*Pañcālaratṭha*)、⑧マッジャ・ラッタ (*Majjharatṭha*)⁽¹⁾、⑨スラセーナ・ラッタ (*Surasenaratṭha*)、⑩アッサカ・ラッタ (*Assakaratṭha*)、⑪アヴァンティ・ラッタ (*Avantiraṭṭha*)、⑫ガンダーラ・ラッタ (*Gandhālaratṭha*)、⑬マッラ・ラッタ (*Mallaratṭha*)、⑭カンボージャ・ラッタ (*Kambojaratṭha*) である。
Sīmavisodhanīpāṭha (*Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版、*MYANMAR* p.066)⁽²⁾

(1) マッチャ (*Maccharatṭha*) と解した。

(2) 復註 *Sīmavisodhanīpāṭha* では 16 のマハー・ジャナパダ (十六大国、*Soḷasamahājanapada*) を「16 のマハー・ナガラ (大都市) (*Soḷasamahānagara*)」とも解釈し、それをマハー・ラッタ (*mahāratṭha*) と称している。しかし本テキストにはカーシ・ラッタ (*Kāsiraṭṭha*) とヴァンサ・ラッタ (*Vamsaraṭṭha*) の 2 国を欠いた 14 国で、何らかの齟齬が生じたものである。

[3] また 16 大国のそれぞれの国が個別に表されるときも同様である。【4】にならってこれを整理してみると次のようになる。まず滞在型から紹介する。なお項目名として出した国名の箇所に他の国名が含まれる場合があるが、この文章は各々の国名の箇所に再録した。

[3-1] アンガ (*Aṅga*)

[賢者カッチャーヤナ (*Kaccāyana*)⁽¹⁾ の出身地として] アンガ国のカーラチャンパー城⁽²⁾に住んでいた (*Aṅgaratṭhe Kālacampānagare vasanti*)。 *Jātaka* 545 (vol. VI p.274)

昔、アンガ国のなかのアンガとマガダ国のなかのマガダとが統治されていたとき、アンガ国とマガダ国間にチャンパーという河があって、そこにナーガ [族] の領域があり、[そこを] チャンペッヤ⁽³⁾ と名づけるナーガ王が統治していた (*atīte Aṅgaratṭhe Aṅge ca Magadharatṭhe Magadhe ca rajjaṃ kārente Aṅga-Magadharatṭhānam antare Campā nāma nadī, tattha nāgabhavaṇaṃ ahoṣi. Campeyyo nāma nāgarājā rajjaṃ kāresi*)。 *Jātaka* 506 (vol. IV p.454)

[ヴィサーカー (*Visākhā*) は] アンガ国のバツディヤ城において、メンダカ長者の息子ダナンジャヤ長者の第一夫人スマナー・デーヴィーの胎内に生を結んだ (*Aṅgaratṭhe Bhaddiyanagare Meṇḍakasetṭhiputassa Dhanañjayaṣeṭṭhino aggamaḥesiyā Sumanādeviyā nāma kucchismiṃ nibbatti*)⁽⁴⁾。 *Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. I p.384)、 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.405)

(1) *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. I p.478) ‘3. Kaccāyana’ を参照。

(2) チャンパー (*Campā*) に同じ。『印度仏教固有名詞辞典』 p.259、並びに *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. I p.576) を参照。

(3) 『印度仏教固有名詞辞典』 p.112 参照。

(4) 岩井昌悟・本澤綱夫・カタブンニョー比丘編『*Visākhā Migāramātā* 関係諸資料』 (本「モノグラフ」第 12 号【資料集篇 VII】) p.109 以下参照。

[3-2] マガダ (*Magadha*)

昔、マガダ国の王舎城で一人のマガダ王が国を統治していた (*atīte Magadharatṭhe Rājagahanagare eko Magadharājā rajjaṃ kāresi*)。 *Jātaka 011* (vol. I p.143)、 *Jātaka 013* (vol. I p.154)、 *Jātaka 031* (vol. I p.199)、 *Jātaka 087* (vol. I p.373)、 *Jātaka 122* (vol. I p.443)、 *Jātaka 131* (vol. I p.466)

そのとき菩薩はちょうど現在の帝釈天が前世にマガダ国のマチャラ村に生れたように、それと同様にマチャラ村の大家の息子として生を結ばれた (*tadā Bodhisatto yathā etarahi sakko purimattabhāve Magadharatṭhe Macalagāmake nibbatti, evaṃ tasmim yeva Macalagāmake mahākulassa putto hutvā nibbatti*)。 *Jātaka 031* (vol. I p.199) (1)

[世尊は] マガダ国のエーカーナラ婆羅門村に依止して、ダッキナギリの大精舎において [カーシ・パーラドゥヴァージャ] 婆羅門の機根が円熟することを期待しつつ住された (*Magadharatṭhe Ekanālaṃ brāhmaṇagāmaṃ upanissāya Dakkhiṇagirimahāvihāre brāhmaṇassa indriyaparipākaṃ āgamayamāno viharati*)。 *Sāratthapakāsini* (vol. I p.242)、 *Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. I p.136)

[ピッパリマーナヴァ (Pippalimāṇava)、即ち摩訶迦葉は] マガダ国のマハーティッタ婆羅門村で、カピラ婆羅門の第一夫人の胎内に生を結んだ (*Magadharatṭhe Mahātittabrāhmaṇagāme Kapilabrāhmaṇassa aggamahesiyā kucchimhi nibbatti*) (2)。 *Sārattha-pakāsini* (vol. II p.191)、 *Manoratha-pūraṇi* (vol. I p.175)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.130)、 *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.260)

[大目連 (Mahāmoggallāna) は] マガダ国のカッラヴァーラ村に依止して沙門法を実践し …… (*Magadharatṭhe Kallavālagāmakam upanissāya samaṇadhammaṃ karonto* ……)。 *Manoratha-pūraṇi* (vol. I p.160)、 *Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. I p.096)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.162)

[マハーガヴァッチャ (Mahāgavaccha) 長老は] マガダ国のナーラカ村で、サミッディという名の婆羅門の子どもとなって生を結んだ (*Magadharatṭhe Nālakagāme Samiddhissa nāma brāhmaṇassa putto hutvā nibbatti*)」 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.059)

[ジェータ (Jenta) 長老は] マガダ国のジェータ村で、ある藩王の子どもとなって生を結んだ (*Magadharatṭhe Jentagāme ekassa maṇḍalīkarājassa putto hutvā nibbatti*)。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.233)

昔、マガダ国などの3つの国の中間に森林があった。菩薩はマガダ国における婆羅門の資産者の家に生を結ばれた。そして青年期に達すると、 …… [出家して、その森林で遍歴遊行者となられた] (*atīte Magadharatṭhādīnaṃ tinnaṃ ratthānaṃ antare aṭavi ahoṣi. Bodhisatto Magadharatṭhe brāhmaṇamahāsālakule nibbattitvā vayappatto* ……)。 *Jātaka 490* (vol. IV p.325)

昔、アング国のなかのアングとマガダ国のなかのマガダとが統治されていたとき、アング国とマガダ国間にチャンパーという河があって、そこにナーガ [族] の領域があり、 [そこを] チャンペッヤと名づけるナーガ王が統治していた (*atīte Aṅgaratṭhe Aṅge ca Magadharatṭhe Magadhe ca rajjaṃ kārente Aṅga-Magadharatṭhānaṃ antare*

Campā nāma nadi, tattha nāgabhavanam ahoṣi. Campeyyo nāma nāgarājā rajjam kāresi)。 *Jātaka* 506 (vol.IV p.454)

パータリ村とは、そのような名のマガダ国のなかの一つの村である (Pāṭaligāmo ti evaṃnāmakō Magadharatṭhe eko gāmo)。 *Udāna-aṭṭhakathā* (p.407)

(1) 「マガダ国のマチャラ村 (Macalagāmake)」は *Sumaṅgala-vilāsini* (vol.III p.710)、*Papañca-sūdanī* (vol. II p.302)、*Sārattha-pakāsini* (vol. I p.338, p.348)、*Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. I p.266)、*Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. II p.484) にもある。

(2) 森章司・本澤綱夫【論文8】「摩訶迦葉 (*Mahākassapa*) の研究」(本「モノグラフ」第9号【個別研究篇 I】) p.124 以下、ならびに p.137 を参照。

[3-3] カーシ (Kāsi)

昔、カーシ国のパーラーナシー城にブラフマダッタと名づける王がいた (atite Kāsiratṭhe Bārāṇasinagare Brahmaddatto nāma rājā ahoṣi)。 *Jātaka* 001 (vol. I p.098)、*Jātaka* 005 (vol. I p.124)、*Jātaka* 006 (vol. I p.127)

昔、カーシ国のパーラーナシー [城] でブラフマダッタ [王] が国を統治していたとき、…… (atite Kāsiratṭhe Bārāṇasiyaṃ Brahmaddatte rajjam kārente ……) *Jātaka* 002 (vol. I p.107)、*Jātaka* 004 (vol. I p.120) ⁽¹⁾

昔、パーラーナシー城でブラフマダッタと名づける王が [国] を統治していたとき、菩薩はカーシ国の西北方の婆羅門の家に生を結ばれた…… (atite Bārāṇasiyaṃ Brahmaddatte rajjam kārente Bodhisatto Kāsiratṭhe udiccabrāhmaṇakule nibbattitvā vayappatto ……)。 *Jātaka* 081 (vol. I p.361)、*Manoratha-pūraṇi* (vol. I p.129)

昔、カーシ国のポータリ ⁽²⁾ という城においてアッサカと名づける王が国を統治していた (atite Kāsiratṭhe Potalināmanagare Assako nāma rājā rajjam kāresi)。 *Jātaka* 207 (vol. II p.155)

昔、カーシ国のスルンダナ城で、カーシ王が国を統治していた (atite Kāsiratṭhe Surundhananagare atite Kāsirājā rajjam kāresi)。 *Jātaka* 458 (vol. IV p.104)

伝え聞くとくころでは、[過去仏] カッサパ世尊はカーシ国におけるセータブヤ城のセータブヤ園で般涅槃された (Kassapo kira Kāsiratṭhe Setabyanagare Setabyuyyāne parinibbāyi)。 *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* (p.270)

昔、パーラーナシーでブラフマダッタ王が国を統治していたとき、カーシ国にダンマパーラ・ガーマという [村] があった (atite Bārāṇasiyaṃ Brahmaddatte rajjam kārente Kāsiratṭhe Dhammapālagāmo nāma ahoṣi)。 *Jātaka* 447 (vol. IV p.050)

(1) *Jātaka* 538 (vol. VI p.001) には atite Kāsiratṭhe Bārāṇasiyaṃ Kāsirājā nāma dhammena rajjam kāresi ともある。

(2) PTS テキスト脚注には Potale, Pātali とする写本もある。 *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版は Pāṭalinagara と校訂。「ポータラ (Potala)」は *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. II p.249) を参照。

[3-4] コーサラ (Kosala)

あるときコーサラ国において、3人がある森の入口で耕作をしていた (ekasmiṃ hi

samaye Kosalaratṭhe tayo janā aññatarasmiṃ aṭavimukhe kasanti) 。 *Jātaka* 067 (vol. I p.306)

伝え聞くところでは、あるときコーサラ国に雨が降らなかった。[それで] 穀物が枯れてしまった…… (ekasmiṃ kira samaye Kosalaratṭhe devo na vassi, sassāni milāyanti……) 。 *Jātaka* 075 (vol. I p.329)

マガダ人の柵目で4パッタはコーサラ国の1柵目である (Māgadhakena patthena cattāro pattā Kosalaratṭhe ekapattho hoti) 。 *Sārattha-pakāsini* (vol. I p.218) 、 *Manoratha-pūraṇi* (vol. V p.061) 、 *Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. II p.476)

伝え聞くところでは、彼 [ローサカ・ティッサ (Losaka-Tissa) 長老の前世] ⁽¹⁾ は再生した所から死んで、コーサラ国のある1千家の漁師村のなかで、1軒の漁師の婦人の胎内に結生を取った (so kira nibbattaṭṭhānato cavitvā Kosalaratṭhe ekasmiṃ kula - saḥassavāse kevaṭṭagāme ekissā kevaṭṭiyā kucchismiṃ paṭisandhiṃ gaṇhi) 。 *Jātaka* 041 (vol. I p.234)

昔、コーサラ国のサーケートでコーサラ王が国を統治していたとき、…… (atīte Kosalaratṭhe Sākete Kosalarāje rajjaṃ kārente……) 。 *Jātaka* 385 (vol. III p.270)

パンカダーというコーサラ人たちの町とは、パンカダーという、そのような名のコーサラ国の町である (Paṅkadhā nāma Kosalānaṃ nigamo ti Paṅkadhā ti evaṃnāmako Kosalaratṭhe nigamo) 。 *Manoratha-pūraṇi* (vol. II p.352)

[世尊は] コーサラ国のパーリレツヤカの林にあるバツダサーラ樹下に住された (Kosalaratṭhe Pāliṇeyake vanasaṇḍe bhaddasālamūle vihāsi) 。 *Udāna-aṭṭhakathā* (p.249)

[ウツガ長老が] コーサラ国のウツガという町で、長老の子どもとなって生を結んだ (Kosalaratṭhe Ugga-nigame seṭṭhiputto hutvā nibbatti) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.184)

[ある比丘が] コーサラ国の辺地の村に依止してアランニャに住していた (Kosalaratṭhe paccantaḡāmaṃ nissāya araṅṅe viharati) 。 *Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. I p.275)

(1) 『印度仏教固有名詞辞典』 p.348、ならびに *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. II p.793) を参照。

[3-5] ヴァッジ (Vajji)

[ヴァッジ人たちのヴァッジ・チェーティヤとは (Vajjinaṃ Vajjicetiyaṇi ti)] ヴァッジ族の王たちがヴァッジ国において、尊ぶ場所故に、‘諸チェーティヤ’ という名称を得たヤッカの諸住処である (Vajjirājūnaṃ Vajjiratṭhe cittikataṭṭhena cetiyaṇi ti laddhanāmāni yakkaṭṭhānāni) 。 *Sumaṅgala-vilāsini* (vol. II p.520) 、 *Manoratha-pūraṇi* (vol. IV p.013)

[ヴァッジ族出身の比丘を註釈して] ヴァッジ国において、王子が傘を捨てて出家した (Vajjiratṭhe rājaputto chattaṃ pahāya pabbajito) 。 *Sārattha-pakāsini* (vol. I p.295) ⁽¹⁾

伝え聞くところでは、彼 [ヴァッジ族出身の比丘] は、ヴァッジ国において、王子が

順番制で得られた統治を捨てて出家して…… (so kira *Vajjiraṭṭhe rājaputto vārena sampattam rajjam pahāya pabbajito*……) 。 *Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. III p.460)

[アンジャーナ林に住む長老は、過去仏・カッサパ世尊の世に] ヴェーサーリーのヴァッジ族の王家に生れて、彼が青年期に達したとき、ヴァッジ国で、干ばつの怖畏、病の怖畏、非人の怖畏という3つの怖畏が生じた (*Vesāliyam Vajjirājakule nibbattivā tassa vayappattakāle Vajjiraṭṭhe avuṭṭhibhayam byādhibhayam amanussabhayan ti tiṇi bhayāni uppajimsu*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.135)

[アヌルッタ (Anuruddha) 長老は] ヴァッジ国のヴェールヴァ村で、後安居に入った (*Vajjiraṭṭhe yattha pacchimavassam upagacchi Veluvagāme*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.073)

(1) *Samanta-pāsādikā* (vol. I p.228) には、*Vajjiputtakā ti Vajjiraṭṭhe Vesāliyam kulānam puttā* ともある。

[3-6] マツラ (Malla)

昔、マツラ国のクサーヴァティー都市にオッカーカと名づける王が法によって国を統治した (*atite Mallaraṭṭhe Kusāvatarājadhāniyam Okkāko nāma rājā dhammena rajjam kāresi*) 。 *Jātaka 531* (vol. V p.278)

[ダッバ (Dabba) 長老は] マツラ国のアヌピヤ城⁽¹⁾で、あるマツラ族の王家に結生を取った (*Mallaraṭṭhe Anupiyānagare ekassa Mallarañño gehe paṭisandhim gaṇhi*) 。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.274) 、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.043)

[ヤサダッタ (Yasadatta) 長老は] マツラ国のマツラ族の王家に生れて、…… (*Mallaraṭṭhe Mallarājakule nibbattivā*……) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. II p.152)

[ある森林に棲んでいた熊が森を出て] マツラ国の辺境の村に行った (*Mallaraṭṭhe paccantagāmaṃ gato*) 。 *Jātaka 490* (vol. IV p.327)

(1) *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.505) にも *Mallaraṭṭhe Anupiyānagare* とあるが、*Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.274) と *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.043) には *Mallaraṭṭhe cārikam caramāno Anupiyānigamaṃ patvā* とあって、アヌピヤの規模を示す属性が「ナガラ (nagara)」と「ニガマ (nigama)」とする場合がある。

[3-7] チェーティヤ (Cetiya)

彼 [アパチャラ (Apacara) 王⁽¹⁾] は] チェーティヤ国のソッティヴァティー城で国を統治した (so *Cetiyaraṭṭhe Soṭṭhivatinagare rajjam kāresi*) 。 *Jātaka 422* (vol. III p.454)

(1) *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. I p.113) を参照。

[3-8] ヴァンサ (Vamsa)

‘ヴァンサの大地に’ というのは、ヴァンサ国に、である (*Vamsabhūmiyan ti Vamsaraṭṭhe*) 。 *Jātaka-aṭṭhakathā* (vol. VI p.237)

昔、ヴァンサ国にコーサンビカ⁽¹⁾ という名の王が国を統治していた (*atite Vamsaraṭṭhe Kosambiko nāma rājā rajjam kāresi*) 。 *Jātaka 444* (vol. IV p.028) 、 *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā* (p.245)

- (1) *Jātaka* 448 (vol.IV p.056) に Kosambiyam Kosambako nāma rājā rajjam kāresi ともある。 *Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.691) ‘1. Kosambaka’ ならびに同書 (vol. I p.692) ‘Kosambika’ を参照。

[3-9] クル (Kuru)

昔、クル国のインダパッタ城⁽¹⁾でダナンジャヤ⁽²⁾が国を統治していたとき…… (atīte Kururattṭhe Indapattanagare Dhanañjaye rajjam kārente……)。 *Jātaka* 276 (vol. II p.366)、 *Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. IV p.088)

昔、クル国のインダパッタ城でダナンジャヤ・コーラヴヤ⁽³⁾という王が国を統治していた…… (atīte Kururattṭhe Indapattanagare Dhanañjayakoravyo nāma rājā⁽⁴⁾ rajjam kāresi⁽⁵⁾)。 *Jātaka* 515 (vol. V p.057) ⁽⁶⁾

昔、クル国のインダパッタ城でユディッティラ姓のダナンジャヤと名づけるコーラヴヤ王⁽⁷⁾が国を統治していた (atīte Kururattṭhe Indapattanagare Yudhiṭṭhilagotto Dha- nañjayo nāma Koravyarājā rajjam kāresi)。 *Jātaka* 413 (vol. III p.400) ⁽⁸⁾

昔、クル国のウッタラパンチャーラ城で、レーヌと名づける王が国を統治していた (atīte Kururattṭhe Uttarapañcālanagare Reṇu nāma rājā rajjam kāresi)。 *Jātaka* 505 (vol. IV p.444)

伝え聞くとくころでは、クル国のハッティニーという都にセーリニーという名の一人の遊女がいた (Kururattṭhe kira Hatthinipure Serinī nāma ekā rūpūpajivinī ahoṣi)。 *Petavatthu-aṭṭhakathā* (p.201)

[ラッタパーラ (Raṭṭhapāla) 長老が] クル国のトゥッラコッティタという町で、ラッタパーラ長老の家に生まれた (Kururattṭhe Thullakoṭṭhitanigame⁽⁹⁾ Raṭṭhapālaseṭṭhige- he nibbatti)。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.257)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.033)

[ミッターカーリー (Mittakālī) ⁽¹⁰⁾長老尼が] クル国のカンマーサダンマという町で、婆羅門の家に生れて…… (Kururattṭhe Kammāsadhammanigame brāhmaṇakule nibbattitvā……)。 *Therīgāthā-aṭṭhakathā* (p.087) ⁽¹¹⁾

- (1) *Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.312) を参照。なお「クル国のインダパッタ城で (Kururattṭhe Indapattanagare)」とする資料は *Jātaka* 537 (vol. V p.457)、 *Cariyāpi-ṭaka-aṭṭhakathā* (p.035, p.248) にもある。
- (2) *Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.1130) ‘2. Dhanañjaya’ を参照。
- (3) PTS テキストには Dhanañjayakorabyo とあるが、Dhanañjayakoravyo に訂正。 *Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.1130) ‘4. Dhanañjaya’ を参照。
- (4) PTS テキストの脚注ならびに *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版により訂正。
- (5) PTS テキストの脚注ならびに *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版により訂正。
- (6) *Jātaka* 545 (vol. VI p.255) にもある。ただし Dhanañjayakorabbo rajjam kāresi とある。
- (7) *Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.1130) ‘4. Dhanañjaya’ を参照。
- (8) *Jātaka* 495 (vol. IV p.361) にもあり、Yudhiṭṭhilagotto Koravyarājā とある。なお PTS テキストの脚注に Yudhiṭṭhilagotto Korabyo nāma rājā とする写本もある。
- (9) *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.033) と *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.327, p.570) には「トゥッラコッティカ町 (Thullakoṭṭhika-nigama)」とある。
- (10) *Theragāthā-aṭṭhakathā*, edited by William Pruitt, PTS, 1998. では「ミッターカーリー

(Mittākāli) 」 (p.087) と校訂。

(11) カンマーサダンマ町は本用例以外、*Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.435) にも *Kururattṭhe Kammāsadhammanigamaṃ agamāsi* とある。

[3-10] パンチャーラ (Pañcāla)

パンチャーラ国のカピラという高貴な城、最上の都に、ジャヤッディサ⁽¹⁾という戒と徳を具えた王がいた (*Pañcālarattṭhe nagaravare Kapilāyaṃ puruttame, rājā Jayaddiso nāma silagaṇam upāgato*) 。 *Cariyāpiṭaka* (p.090)

昔、パンチャーラ国のカピラ城に、チューラニー・ブラフマダッタという王がいた (*atite Pañcālarattṭhe Kapilanagare Cūlanī-Brahmadatto nāma rājā ahoṣi*) 。

Petavat- thu-aṭṭhakathā (p.161)

(1) 『印度仏教固有名詞辞典』p.243、並びに *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. I p.943) を参照。

[3-11] マッチャ (Maccha)

[「マッチャ人 (Macchā) 」という呼びかけの言葉を註釈して] そして友よ、君、マッチャ国の王よ、 [という意] である (*Macchā cā ti tvañ ca samma Maccharattṭhe rāja*)

⁽¹⁾ *Jātaka-aṭṭhakathā* (vol. VI p.280)

(1) ただし *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版では、*Macchā cā ti tvañ ca, samma Maccharāja* (vol. VI p.280) とする。

[3-12] アッサカ (Assaka)

[アッサカ王の息子スジャータ⁽¹⁾は] アッサカ国でアッサカ王の第一王妃の胎内に生じた (*Assakarattṭhe Assakarñño aggamahesiyā kucchismiṃ nibbatti*) 。 *Vimānavatthu-aṭṭhakathā* (p.259)

昔、カーリング国のダントプラという都でカーリング王が国を統治していたとき、アッサカ国ではポータリという都でアッサカ王が国を統治していた (*atite Kāliṅgarattṭhe Dantapurānagare Kāliṅge rajjaṃ kārente Assakarattṭhe Potalinagare Assako nāma rājā⁽²⁾ rajjaṃ kāresi*) 。 *Jātaka 301* (vol. III p.003) 、 *Vimānavatthu-aṭṭhakathā* (p.259) ⁽³⁾

(1) *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. II p.1184) ‘12. Sujāta’ を参照。

(2) PTS テキストには *Assako rajjaṃ kāresi* と校訂するが、同テキストの脚注により訂正。

(3) 同テキストには *Assakarattṭhe Potalinagare Assakarājā rajjaṃ kāresi* とある。

[3-13] アヴァンティ (Avanti)

昔、アヴァンティ国のウッジェーニー [城]⁽¹⁾ では、アヴァンティ大王が国を統治していた。そのとき、ウッジェーニー [城] の郊外にはチャンダーラ村があった (*atite Avantirattṭhe Ujjeniyāṃ Avantimahārājā nāma rajjaṃ kāresi. tadā Ujjeniyā bahi caṇḍālagāmako ahoṣi⁽²⁾*) 。 *Jātaka 498* (vol. IV p.390)

[菩薩はカーラデーヴァラ (Kāladevala) に] 「ダッキナーパタ (南路) のアヴァンティ国にガナセーラという山がある。その近くに住みなさい」と言って、 [彼を] 遣わした (*Dakkhiṇāpathe Avantirattṭhe Ghanaselapabbato nāma atthi, taṃ upanissāya vasāhī⁽³⁾ ti pesesi.*) 。 *Jātaka 522* (vol. V p.133)

[クマープッタ (Kumāputta) ⁽⁴⁾ 長老は] アヴァンティ国のヴェールカントカ城で、

ガハパティ [資産家] の家に生れた (*Avantiraṭṭhe Velukaṇṭakanagare gahapatikule nibbatta*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.105)

[ソーナ・クティカンナ (*Soṇa-Kuṭikaṇṇa*) (5) 長老は] アヴァンティ国のクララガラ [城] (6) で、大いに繁栄したセツティン (長者) の子どもとなって生れた (*Avantiraṭṭhe Kuraraghare mahāvibhavassa seṭṭhino putto hutvā nibbatti*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. II p.154)

[イシダッタ (*Isidatta*) (7) 長老は] アヴァンティ国のヴァッダ村で、ある隊商指導者の子どもとなって生れた (*Avantiraṭṭhe Vaḍḍhagāme aññatarassa satthavāhassa putto hutvā nibbatti*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.248)

[ダンマパーラ (*Dhammapāla*) (8) 長老は] アヴァンティ国の婆羅門の家に生れて…… (*Avantiraṭṭhe brāhmaṇakule nibbattitvā……*) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. II p.070)

- (1) 例えば *Therigāthā-aṭṭhakathā* (p.266) に「ウツジェーニーというアヴァンティ国の最上の都市に (*Ujjenināmake Avantiraṭṭhe uttamanagare*) 」などとある。
- (2) PTS テキストには *hoti* と校訂するが、同テキストの脚注ならびに *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版により訂正。
- (3) PTS テキストには *vasā* と校訂するが、同テキストの脚注ならびに *Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版により訂正。
- (4) *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. II p.015) ‘19. Nanda Kumāputta’ を参照。
- (5) 同上書 (vol. II p.1291) を参照。
- (6) *Udāna-aṭṭhakathā* (p.307) に *Kuraraghare ti evaṃnāmake nagare* とあり、その規模を示す属性は「ナガラ (*nagara*) 」とする。*Sārattha-pakāsini* (vol. II p.258) も同様。
- (7) *Dictionary of Pāli Proper Names*. (vol. I p.320) を参照。
- (8) 同上書 (vol. I p.1145) ‘1. Dhammapāla’ を参照。

[3-14] ガンダーラ (*Gandhāra*)

昔、ガンダーラ国のタッカシラー [城] (1) では、ガンダーラ王が国を統治していた (*atite Gandhāraratṭhe Takkasilāyaṃ Gandhārarājā rajjaṃ kāresi*) 。 *Jātaka 028* (vol. I p.191)

昔、バーラーナシーでブラフマダッタが国を統治していたときに、菩薩はガンダーラ国のタッカシラー [城] で婆羅門の家に生れて…… (*atite Bārāṇasiyaṃ Brahmadaṭṭe rajjaṃ kārente Boddhisatto Gandhāraratṭhe Takkasilāyaṃ brāhmaṇakule nibbattitvā……*) 。 *Jātaka 061* (vol. I p.285)

昔、ガンダーラ国のタッカシラー [城] で、菩薩は四方第一の師となって、500人の学童たちに技芸を教えていた (*atite Gandhāraratṭhe Takkasilāyaṃ Boddhisatto disāpāmokkho ācariyo hutvā pañcamāṇavakasatāni sippaṃ uggaṇhāpeti*) 。 *Jātaka 071* (vol. I p.317)

昔、ガンダーラ国で、菩薩がガンダーラ王の子となって、父王の死後、領土を確立して法によって国を統治した。また中央の地方では、ヴィデーハ国にヴィデーハという王が国を統治した (*atite Gandhāraratṭhe Boddhisatto Gandhārañño putto hutvā pitu accayena rajje patiṭṭhāya dhammena rajjaṃ kāresi. Majjhimapadese pi Videharaṭṭhe*

Videho nāma rājā rajjam kāresi) 。 *Jātaka* 406 (vol.III p.364)

(1) 例えば *Jātaka* 096 (vol. I p.395) などに *Gandhāraṭṭhe* *Takkasilānagaram* とある。

[3-15] 〈カンボージャ (Kamboja) 〉

[女性は] 財を集めるために、カンボージャ国へ行かない (*bhoga-saṃharaṇatthāya Kambojarattham* *na gacchati*) 。 *Manoratha-pūraṇi* (vol.III p.110)

とあるほか、僅か1例ではあるが「スーラセーナ (*Sūrasenarattha*) 」⁽¹⁾ も同様の表現となっている。

(1) *Simavisodhanipāṭha* (*Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版、*MYANMAR* p.066) のみである。

[4] 次は遊行・移動型の文章中に現れた16大国の例である。

[4-1] アンガ (Aṅga)

[雪山 (*Himvanta*) で出家し修行していた4人の婆羅門が] ……塩や酸味のものを得るために乞食しながら、アンガ国のカーラチャンパー城にやって来て食を求めた (…
…*loṇambilasevanatthāya cārikam caramānā Aṅgaratthe Kālacampānagaram patvā rā - juyyāne vasitvā punadivase bhikkhāya nagaram pavisiṃsu*) 。 *Jātaka* 545 (vol.VI p.256)

[マノージャ (*Manoja*) 王はコーサラ王を降伏した後、] アンガ国に行つてアンガを奪い、次いでマガダ国へこれを征伐するというようにして、全インドの諸王を自己に服させ、かの諸王たちを従えてブラフマヴァッタ城へと帰った (*sampaṭicchitvā tam attano vase vattetvā dve senā ādāya Aṅgarattham gantvā Aṅgam gahetvā tato Magadharatthan ti eten' upāyena sakalajambudīpe rājāno attano vase vattetvā tato tehi parivuto Brahmavaḍḍhananagaram eva gato*) 。 *Jātaka* 532 (vol.V p.316)

[4-2] マガダ (Magadha)

[如来は] サーヴァッティ [城] よりマガダ国に来て、そこで遊行してあるガーマに到られた (*Sāvatthito Magadharattham gantvā tattha cārikam caramāno aññataram gāmakam sampāpuṇi*) ⁽¹⁾ 。 *Jātaka* 044 (vol. I p.246)

(1) ただし *Jātaka* 044 (vol. I p.246) には原始仏教聖典に見られるような表現もある。例えば「[大師は (*satthā*)] マガダ人びとの住む [諸ジャナパダ] を遊行して、ある一つのガーマカにおいて愚かな村人について語った (*Magadhesu cārikam caramāno aññatarasmim gāmake bālagāmikamanusse ārabha katesi*) 」とある。

[4-3] カーシ (Kāsi)

[ブラフマッタ王は] プローヒタ (顧問官) と共に変装で分らなくして、カーシ国を歩き廻っても、誰も [王の] 不徳を語るものを見い出さず…… (*purohitena saddhim aññatakavesen' eva Kāsiratthe caranto kañ ci aguṇam kathentaṃ adisvā*……) 。 *Jātaka* 496 (vol.IV p.370)

[4-4] コーサラ (Kosala)

私 [世尊] はコーサラ国を遊行して、火聚に喩えて、ある経の箇所を説明したとき、60人の比丘たちが阿羅漢に達した…… (*mayā Kosalaratthe cārikam carantena aggikkhandhena upametvā ekasmim sutte desite satthi bhikkhū arahattaṃ pāpuṇissanti*

……)。*Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.067)

大師は制限のない比丘サンガに囲まれて、コーサラ国を遊行のために出発し、村や町を順番に経て、1日に1ガーヴタ、半ヨージャナ、3ガーヴタ、1ヨージャナ⁽¹⁾を限度として遊行をして、ある地方で、……(satthā aparicchinnena bhikkhusaṅghena parivuto Kosalarattham cārikāya nikkhanto gāmanigamapaṭipāṭiyā ekadivasam gāvuta-aḍḍhayojanatigāvutayojanaparamam cārikam caranto ekasmiṃ padese ……) ⁽²⁾。

Manoratha-pūraṇī (vol. I p.067)

伝え聞くところでは、500人の比丘たちはコーサラ国で雨安居を過ごした後、大師を拝謁したいと、ジェータ林にやって来て、大師を礼拝して傍らに座した(Kosalaratthe kira pañcasatā bhikkhū vassam vasitvā vuṭṭhavassā "satthāraṃ passissāmā" ti Jetavanam gantvā satthāraṃ vanditvā ekamantaṃ nisidiṃsu)。*Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. II p.161)

(1) 距離の単位ガーヴタ、ヨージャナについては、森章司・本澤綱夫「【論文4】由旬(yojana)の再検証」(本「モノグラフ」【個別研究篇II】第6号)を参照。

(2) ただし *Samanta-pāsādikā* (vol. II p.286) には「昔、500人の辟支仏がカーシ人たちやコーサラ人たち等の諸ジャナパダのなかを托鉢のために遊行して……(pubbe kira pañcasatamā paccekabuddhā Kāsi-Kosalādisu janapadesu piṇḍāya caritvā ……)」という表現もある。

[4-5] ヴァッジ (Vajji)

[世尊は] ヴァッジ国を遊行してナーティカに到着された (*Vajjiratthe cārikam caramāno Nātikam anuppato*)。 *Papañca-sūdanī* (vol. II p.235)

[4-6] マツラ (Malla)

[世尊は] カピラヴァットゥの都よりマツラ国を遊行してアヌピヤのアンバ林に赴かれた (*Kapilavatthupurato Mallaratthe cārikam caramāno Anupiya-ambavanam agamāsi*)。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.191)、 *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.270) ⁽¹⁾

[大師(世尊)と比丘サンガの集りは (satthā bhikkhusaṅghaparivāro)] マツラ国を遊行してアヌピヤという町⁽²⁾に至って、アヌピヤのアンバ林に住された (*Mallaratthe cārikam caramāno Anupiyanimagam patvā Anupiyambavane viharati*)。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.274)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.043)

[大師(世尊)は] マツラ国に随意の間住された後、王舎城に赴いて竹林に住処を準備された (*Mallaratthe yathābhirantaṃ viharitvā Rājagaham gantvā Veḷuvane vāsam kappesi*)。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.275)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.044)

(1) 本テキストでは *Kapilavatthunagarato Mallaratthe cārikam caramāno Anupiyambavanam pāpuṇi* とあって、その規模を示す属性は「プラ (pura)」ではなく「ナガラ (nagara)」としている。

(2) *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.274)、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. I p.043)、 *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.505) に *Mallaratthe Anupiyana-gare* とあり、その規模を示す属性を「ナガラ (nagara)」とする。

[4-7] 〈チェーティヤ (Cetiya)、チェーティ (Ceti)〉

[アヌルッダ (Anuruddha) 長老は] チェーティヤ国のパーチーナヴァンサ・ミガダーヤに行って、沙門法を實踐し…… (Cetiyaraṭṭhe Pācīnavamsa-migadāyaṃ gantvā samaṇadhammaṃ karonto……) 。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.191) ⁽¹⁾、 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.065) 、 *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.271) ⁽²⁾

[アヌルッダ (Anuruddha) 長老は] チェーティ国に行って、沙門法を實踐し…… (Cetiraṭṭhaṃ gantvā samaṇadhammaṃ karonto……) 。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. IV p.118)

(1) *Manoratha-pūraṇī* (vol. IV p.122) に Cetiraṭṭhe Pācīnavamsadāye とある。

(2) 本テキストには Pācīnavamsadāyaṃ とある。

[4-8] クル (Kuru)

[世尊は] クル国のなかの諸ジャナパダを遊行して、トゥッラコッティカ ⁽¹⁾ に到達された (Kururaṭṭhe janapada-cārikaṃ ⁽²⁾ caranto Thullakoṭṭhikaṃ anupāpuṇi) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.034) 、 *Apadāna-aṭṭhakathā* (p.328, p.570)

[世尊は] クル国のカンマーサダンマと名づける町に赴かれた (Kururaṭṭhe Kammasadhammaṃ nāma nigamaṃ agamāsi) 。 *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.435)

(1) *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.257) には Kururaṭṭhe Thullakoṭṭhita-nigame とある。

(2) *Samanta-pāsādikā* の復註 *Sāratthadīpanī* によれば janapadacārikan ti janapadesu caraṇaṃ …… (*Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版、*MYANMAR* vol. I p.452) とあって、この合成語の *janapada* を複数形と見ている。

[4-9] アッサカ (Assaka)

[カーリング (Kāliṅga) というカーリング国の王が] 全インドの国土を巡り歩いて、アッサカ国のポータリ城に到達した (sakalajambudīpaṃ vicaritvā Assakaraṭṭhe Poṭalinagaraṃ pāpuṇiṃsu) 。 *Jātaka* 301 (vol. III p.003)

[4-10] アヴァンティ (Avanti)

私 [ソーナ・クティカンナ (Soṇa-kuṭiKaṇṇa) 長老は] アヴァンティ国から舎衛城に行った (ahaṃ Avantiraṭṭho Sāvattiṃ gato) 。 *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. II p.156)

[4-11] カンボージャ (Kamboja)

妻帯者の婆羅門が交易に従事しつつ、ヨーナカ国やカンボージャ国へ行って死んだ (brāhmaṇo sabhariyo vaṇijjaṃ payojento Yonakaratṭhaṃ vā Kambojaratṭhaṃ vā gantvā kālaṃ karoti) 。 *Papañca-sūdanī* (vol. III p.409)

[4-12] ヨーナカ (Yonaka) ⁽¹⁾

妻帯者の婆羅門が交易に従事しつつ、ヨーナカ国やカンボージャ国へ行って死んだ (brāhmaṇo sabhariyo vaṇijjaṃ payojento Yonakaratṭhaṃ vā Kambojaratṭhaṃ vā gantvā kālaṃ karoti) 。 *Papañca-sūdanī* (vol. III p.409) ⁽²⁾

(1) *Samanta-pāsādikā* (vol. I p.067) には「ヨーナ・ラッタ (Yona-raṭṭha) 」ともある。

(2) *Papañca-sūdanī* (vol. III p.409) と *Samanta-pāsādikā* (vol. I p.067) にも「ヨーナカ・ラッタ (Yonaka-raṭṭha) 」とある。

[4-13] 以上のように、A文献資料ではジャナパダとあったものが、B文献資料になるとラッタと表現されるようになる。

[5] 16 大国以外も同様である。

スナーパランタは「スナーパランタ・ラッタ (*Sunāparanta-raṭṭha*)」という表現が *Papañca-sūdanī* (vol. V p.086)、*Sārattha-pakāsini* (vol. II p.374) に現われる。また舎衛城と王舎城の間（舎衛城から 30 由旬）、パーラーナシーから 12 由旬のところにあつたとされる非アーリヤ人のアーラヴィー⁽¹⁾は「アーラヴィー・ラッタ (*Ālavi-raṭṭha*)」⁽²⁾、あるいは「アーラヴィー・ラッタ (*Ālavi-raṭṭha*)」⁽³⁾とあり、ヴァツァ族 (*Vatsa*) に従属していたとされるバグガも「バグガ・ラッタ (*Bhagga-raṭṭha*)」⁽⁴⁾とある。またガンジス河河口地方、もしくはそれ以南の東インドに位置すると推定されているスンバも「スンバ・ラッタ (*Sumbha-raṭṭha*)」⁽⁵⁾とある。さらにヴィデーハも「ヴィデーハ・ラッタ (*Videha-raṭṭha*)」⁽⁶⁾と表現されるほか、ウッタラ・パンチャーラのナガラも「カンピッラ・ラッタ (*Kampilla-raṭṭha*)」⁽⁷⁾とある。

一方、釈迦族は「サーキヤ・ジャナパダ (*Sākiya-janapada*)」⁽⁸⁾とあるほか、1 例のみ「サッカ・ラッタ (*Sakka-raṭṭha*)」とあるが釈迦国の意ではなく⁽⁹⁾、それ以外にも「サクヤー・ラッタ (*Sakyā-raṭṭha*)」、「サーキヤー・ラッタ (*Sākiyā-raṭṭha*)」といった表現は見出し得ない。同様に釈迦族に隣接し、姻戚関係にあつたコーリヤも「コーリヤ・ジャナパダ (*Koliya-janapada*)」⁽¹⁰⁾とはあるが、「コーリヤ・ラッタ (*Koliya-raṭṭha*)」という表現は確認できない。釈迦やコーリヤは共和制の国であつたという認識が強く持たれていたのであろうか。

- (1) 水野弘元「初期仏教の印度に於ける流通分布に就いて」pp.042-043、ならびに中村元『インド古代史(上)』p.269を参照。なお本論文【5】[5] p.134の註(1)参照。
- (2) *Ālavi-raṭṭha*は *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.389)、*Manoratha-pūraṇī* (vol. II p.224)、*Samanta-pāsādikā* (vol. III p.561)、*Samanta-pāsādikā* (vol. IV p.760)にある。
- (3) *Ālavi-raṭṭha*は *Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. I p.217)、*Therīgāthā-aṭṭhakathā* (p.062)にある。
- (4) *Bhagga-raṭṭha*は *Manoratha-pūraṇī* (vol. I p.400)にある。なお上掲の水野論文 p.035を参照。
- (5) *Sumbha-raṭṭha*は *Jātaka 096* (vol. I p.393)にある。なお上掲の水野論文 pp.008-009を参照。
- (6) *Videha-raṭṭha*は *Papañca-sūdanī* (vol. III p.313)、*Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā* (p.051)、*Jātaka 009* (vol. I p.137)、*Jātaka 160* (vol. II p.039)、*Jātaka 264* (vol. II p.333)、*Jātaka 406* (vol. III p.364)、*Jātaka 408* (vol. III p.378)、*Jātaka 524* (vol. V p.164)、*Jātaka 539* (vol. VI p.030)、*Jātaka 541* (vol. VI p.095)、*Jātaka 544* (vol. VI p.220)ほか多数ある。なお上掲の水野論文 pp.064-065、ならびに中村元『インド古代史(上)』p.159以降を参照。
- (7) *Jātaka 546* (vol. VI p.391)に[賢者マホーサダ (*Mahosadha*)、即ち菩薩の放たれた若いオウム (*suva-potaka*) が]インドを探しまわり、カンピッラ・ラッタのウッタラ・パンチャーラのナガラに達した (*Jambudīpaṃ parigaṇhanto Kampillarattṭhe Uttarapañcāla-nagaraṃ pāpuṇi*)とある。カンピッラ (*Kampilla*)はウッタラ・パンチャーラ (*Uttarapañcāla*)の首都である。*Dictionary of Pāli Proper Names.* (vol. I p.525)、同 (vol. I p.357)を参照。
- (8) *Papañca-sūdanī* (vol. II p.135)

- (9) *Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā* (vol. III p.680) には、Ghosito nāma paccekasambuddhe katādhikāro Sakkaratṭhe Kosambiyam seṭṭhi とあって、この場合の Sakka は三十三天を指しているようだが、不明である。
- (10) *Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. II p.063) なお上掲の水野論文 p.058 以降を参照。

[6] 以上のように原始仏教聖典においては、国はジャナパダという言葉によって表現されていたのであるが、註釈書時代になるとラッタと表現されるようになる。このような経緯が、例えば *Udāna008-006* (p.085) の「[至尊は] マガダ人たちの中に遊行して (*Magadhesu cārikam caramāno*)」を、註釈書 *Udāna-aṭṭhakathā* (p.407) では「‘マガダ人たちのなかに’とは、マガダ・ラッタのなかに、である (*Magadhesu ti Magadharatṭhe*)」と解釈するようになることに端的に現れている。上記のような事情は、例えば *Manorathapūraṇī* (vol. III p.379) に「‘チェーティ人たちのなかに’とは、チェーティ・ラッタのなかに、である (*Cetisū ti Cetiratṭhe*)」とあるほか、*Nettipakaraṇa-aṭṭhakathā* (*Chaṭṭha Saṅgāyana CD-ROM* 版、*MYANMAR* p.229) のカーシの解釈など⁽¹⁾にも現れている。

もちろんこれはインドの歴史的变化を反映したものであって、原始仏教時代には未だ十分な国家組織が整わず、しかも王制国家と部族共和制国家が並存していたものが、徐々に王制国家の力が強くなり、ついには王制国家のみしか残らなかったということを表すのである。

- (1) 同様に解釈する資料を示すと、以下の通りである。

アンガ : *Angesū ti Angaratṭhe Kālacampānagare vasanti Jātaka-aṭṭhakathā* (vol. VI p.274)

カーシ・コーサラ : *Kāsi-Kosalesū ti……Kāsiratṭhe ca Kosalaratṭhe cā ti attho Sumaṅgala-vilāsini* (vol. II p.637)

ヴァッジ : *Vajjīnam Veḷuvagāme ti Vajjiratṭhassa Veḷuvagāme Theragāthā-aṭṭhakathā* (vol. III p.073)

マッラ : *Mallesū ti Mallaratṭhe Manoratha-pūraṇī* (vol. IV p.203)

ヴァンサ : *Vamsabhūmiyan ti Vamsaratṭhe Jātaka-aṭṭhakathā* (vol. VI p.237)

アッサカ・アヴァンティ : *Assakāvantin ti Assakarattṭham vā Aāvantarattṭham vā Jātaka-aṭṭhakathā* (vol. V p.318)

カンボージャ : *Kambojan ti Kambojarattṭham Petavatthu-aṭṭhakathā* (p.113)

などとある。

[7] またパーリの註釈書になると、ジャンプ州という概念が登場する。原始仏教時代の地縁血縁的に結ばれたジャナパダは、せいぜいコーサラとかマガダといった範囲に限られたのに、これが註釈書時代になるとインドに大帝国が形成されたために⁽¹⁾、インド全体を一つの統一体とする認識が生じたということである。

- (1) 時代的背景としては、アショーカ王による全インド統一国家の成立という歴史的な体験、あるいは転輪聖王観といった観念を抜きにしては考えられないであろう。なお中村元『原始仏教の社会思想』(中村元選集 [決定版] 第18巻、春秋社 2002) p.445 以降、ならびに山崎元一『古代インドの王権と宗教』pp.102-103 を参照。

[7-1] ジャータカに「全ジャンプ州の王権は (*sakala-Jambudīpe rajjam*)」⁽¹⁾と表現されるのがそれであって、しかもその広さは「1万ヨーjana (*dasasahassa-yojanaparimāṇo*)」

②とされている。ヨージャナには時と場合によってさまざまな長さを表すが、1 ヨージャナを 10km とすると、全ジャンプ州の広さは 10 万 km ということになる。

また中央と辺境のジャナパダという考え方にも、ジャンプ州の中で位置付けられるようになってきており、全インド的な視点が働いていると言えよう。このような視点が註釈書文献資料における 1 つの特徴である。

(1) *Jātaka* 546 (vol. VI p.460) そのほか *Jātaka* 445 (vol. IV p.040) などにもある。

(2) *Jātaka* 「遠くない因縁話」 (vol. I p.049)、*Papañca-sūdanī* (vol. III p.035)、*Manoratha-pūraṇī* (vol. IV p.107)、*Udāna-aṭṭhakathā* (vol. III p.300)、*Suttanipāta-aṭṭhakathā* (vol. II p.437) にもある。

[7-2] このように全インドをジャンプ州と括るような認識が生じてくると、このジャンプ州全体をラッタとする認識も生じることになる。例えば、既述の *Jātaka* 454 に ①、デーヴァガッバー (*Devagabbhā*) の子どもである 10 人の兄弟がカンボージャの首都ドウヴァーラヴァティー (*Dvāravatī*) というナガラを滅ぼし、さらに「全ジャンプ州における 6 万 3 千のナガラで、……すべての王を殺害した (*sakala-Jambudīpe tesatṭhiyā nagarasahassesu sabbe rājāno……jīvitakkhayaṃ pāpetvā*)」。そしてドウヴァーラヴァティーを居城として、兄弟で「ラッジャ (領地、Skt. *rājya*) ②を 10 に分配した (*rajjam dasa koṭṭhāse katvā vibhajimsu*)」とされるところにこれを見ることができる。ここではジャンプ州全体にあたる一つのラッジャを 10 に分割したことになるわけである。

(1) *Jātaka* 454 (vol. IV p.079) 本論文【2】 [2] [2-5] p.098 に既述。

(2) *raja*、即ち梵語の *rājya* で、これについては本論文【2】 [2] [2-1] p.095 以降、ならびに【7】 [1] p.166 以降で述べたラッタの定義を参照。

[8] 以上のように註釈書時代になると、国はラッタという言葉で表現されるようになり、さらにはそれらの国を統括するようなジャンプ洲という概念も生まれてくる。これはいうまでもなく註釈書が制作されたときはすでに、16 大国が 4 大国に収斂され、そしてついにアショーカ王のマウリヤ王朝という大帝國が成立したことを知っているからであって、それは王の種類を説く原始仏教聖典 (律藏) ①の大地の諸王 (*pathabyā-rājā*) と地方の諸王 (*padesa-rājā*) を、アショーカ王とそしてパセーナディ王とビンピサーラ王によって説明することによって明らかである ②。

このように *janapada* と *raṭṭha* という言葉は、時代が経過し、社会背景が変化するに伴って用例に変化が生じているが、しかしながらその持つ原義と背景にあるものは変化していないことはいうまでもない。すなわち *janapada* は地縁血縁に結ばれたぼんやりとした領域を示すゲメインシャフト的な要素をもつ語であり、*raṭṭha* は政治権力の及ぶ境界のはっきりした領域を示す、いわばゲゼルシャフト的な要素をもつ語であるということである。

(1) *Vinaya* 「波羅夷 002」 (vol. III p.046)

(2) *Samanta-pāsādikā* (vol. II p.309)、『善見毘婆沙』卷第九 (大正 24 p.732 下) なお本論文【7】 [3] [3-2] p.176 の註 (4) を参照。

附：「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」で採用する「国」の基準

最後に、そもそもこの論文を書くことになった最初の動機である、「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」の「その他国篇」において「国」と立てるべき基準について一言しておきたい。

以上の論考によって、われわれが「国」と認めてよい基準は以下のようにまとめられるであろう。

- (1) 16 大国として上げられている「大国」
- (2) *janapada* の複数形で表される複数のナガラやニガマ、ガーマを含む「普通の国」
- (3) 註釈書文献になって *raṭṭha* と記されるようになる国

実はこの基準では、原始仏教聖典と註釈書文献では矛盾する国が出てきているが、ともかく上記の基準に合致する国を最大限に、パーリ語によってその音順に挙げれば次のようになる。16 大国として扱ってきた国には * を付しておいた。ヨーナも含ませているので合計では 17 国になっている。

- アング (Aṅgānaṃ) *
- アングッタラーパ (Aṅguttarāpa)
- アヴァンティ (Avanti) *
- アッサカ (Assaka) *
- アーラヴィー (Āḷavi, Āḷavi)
- カンピッラ (Kampilla)
- カンボージャ (Kamboja) *
- カリング (Kaliṅga)
- カーシ (Kāsi) *
- クル (Kuru) *
- コーリヤ (Koliya, Koḷiya)
- コーサラ (Kosala) *
- ガンダーラ (Gandhāra) *
- チェーティ (Ceti, Cetiya) *
- パンチャーラ (Pañcāla) *
- バツガ (Bhagga)
- マガダ (Magadha) *
- マツチャ (Maccha, Majjha) *
- マッラ (Malla) *
- ヨーナ (Yona, Yonaka) *
- ヴァッジ (Vajji) *
- ヴァンサ (Vamsa) *
- ヴィデーハ (Videha)
- サーキヤ (Sākiya, Sakka)
- スナーパラнта (Sunāparanta)
- スンバ (Sumbha)

スーラセーナ (Sūrasena) *

ソーヴィーラ (Sovira)

ただし実際に作業する段階では、原始仏教聖典と註釈書の矛盾を解決する必要もあるし、資料数などの他の要素からも、再検討しなければならないことをお断りしておきたい。

以上

【付記】本稿は、金子が資料収集とその整理を行ったうえで粗原稿に仕上げたものを、森が再構成しなおして最終原稿として完成させたものである。